

富士登山競走と黒駒体協

戦後、日本が著しい経済復興を遂げ、人々の暮らしも安定の兆しを見せ始めた昭和20年代後半、新憲法のもと民主政策が浸透し、日本中で自治的機運が高まっていった。県下でも青年団を中心として市町村間が競い合うスポーツや文化交流事業が盛んに行われ、それらが経済復興とともに地域コミュニティの重要な役割を担うようになっていた。そうした新しい時代に向けて多くの若者が希望を抱き、現代日本勇躍の礎を築いていく渦中で富士登山競走は産声をあげ、その大会への挑戦をきっかけに旧黒駒村（現笛吹市御坂町黒駒地区）の青年有志の中から黒駒体協は結成された。

東八代郡黒駒村は全戸で400戸に満たない小さな村で、娯楽といっても昨今のように充実した施設や用具が身近にあったわけではない。しかしながら、スポーツとして走ることは万人に受け入れられた。昭和の20年代、山梨の農山村ではまだ養蚕や稲作がさかんで、家庭での煮炊きはもちろん身近にある動力も依然、薪や木炭に頼っていた時代である。そのため御坂峠の街道筋にある黒駒地区では重い薪を背負って山の斜面を往復する木炭生産に従事する家々も多く、そこで鍛えあげられた健脚は地区対抗の運動会や駅伝で大いに活かされた。舗装道路など一部に限られ、信号機もない往来では、いかつい威容の国産自動車が土ぼこりを上げて悠然と走っていた当時においては、主要幹線道路をコースとしたマラソン大会や駅伝が至るところで開催されていた。黒駒体協の勇士は、それら競技会にこぞって参戦し、破竹の勢いで勝利を挙げていった。昭和27年の記録によると、富士登山競走・小檜山登山競走・蜂城山登山競走、駅伝においては盆地一周・県下一周・甘利山一韭崎・西八代縦断・甲府一河口湖・甲府一岡谷・御殿場一富士山頂間など出場したすべての大会を優勝で飾るという輝かしい戦績を上げている。なかでも日本人として初めてオリンピック（第5回ストックホルム大会）のマラソンに出場した金栗四三が主催した富士山継走大会（御殿場一富士山頂間往復）で、箱根駅伝に出場する大学強豪チームを破って優勝旗を持ち帰ることとなり、これが黒駒体協青年らの大きな自信となった。また早稲田大学で名伯楽と謳われた中村清氏が趣味の猟で御坂山中を訪れた際、その勢子（猟の獲物を追い出す役）を地元の青年たちが請け負った縁があって、体協が出場する大会のコーチ役を中村氏が買って出て、レース中、選手に並走するトラックから檄を飛ばして鼓舞したという逸話も残っている。これらのエピソードは黒駒体協の青年らの上昇志向をあり、その後のチームが数々の大会において勇

躍する一因となった。

富士登山競走における黒駒体協の活躍は、昭和23年の第1回大会において黒駒村の神宮寺昭さんが第2位に入賞したことに始まる。神宮寺の富士登山競走での快挙は新聞紙面で大きく取り上げられ、黒駒地区の青年たちの士気は一気に高まった。当時、19歳だった堀内好男は実家の両隣に住む先輩の弦間光明と弦間泰十に「俺たちも富士登山競走に出よう」と誘った。次回大会への出場を期し意気投合した3人は、勤めや家業に従事する傍ら、夕食後になると黒駒からひとつ上の地区の藤野木にある新田橋を目指して走った。往復で16km、大会までの2か月間休むことなく走り通した。1か月も過ぎる頃にはメンバーは6名に増え、これがのちの黒駒体協の主力となり戦う集団として力をつけていった。チーム内では年長であった弦間泰十が全体のコーチ役を務め、お互い励まし合いつつも個々の選手間のライバル意識も強まっていった。のちに富士登山競走三連覇という偉業を達成する弦間光明は、仲間との練習を終え「おやすみ」のあいさつを交わした後、密かに裏山に入り山中にある送電用の鉄塔まで、急峻な登山道を想定してひとり黙々と練習を重ねたと述懐している。

第2回大会は、折からの台風の影響で五合目打ち切り中止となったが、翌25年、第3回の富士登山競走大会は絶好の好天に恵まれた。猛練習を続けた黒駒体協一行は前日から富士上吉田町の笠井旅館に宿泊し、満を持してレースに臨んだ。早朝、スタート地点の富士吉田駅に到着すると既に一帯は人垣で埋め尽くされ地元町民の熱狂ぶりに圧倒された。一同はお互いの健闘を誓い合うとスタートラインに並び、午前7時30分、競技役員のピストルを合図に駅前広場を飛び出した。スタート後も沿道は細かく振られる小旗の波で途絶えることがなかった。北口本宮浅間神社の杉並木を経て、木立深まる中ノ茶屋、第一関門の馬返しへと進む頃には人の気配は次第に途絶え、時折現れる登山客やコースに待機する地元青年団、消防団員、茶屋の娘たちからの声援が飛ぶ。勝負は山道に入ってからと決め黒駒勢は先行するライバルたちを一人、二人と捉えていった。五合目では大勢の役員、一般客から激励を受けたが、ひといき入れる間もなく飛び出す。その後は登山道の勾配は一層きつくなり、著しい気圧の変化と標高差によって呼吸もさらに荒くなる。登山道は富士山特有のざらついた砂地や岩場のため、疲労で膝も思うように上がらなくなった。途中、強力（山小屋などに物資を運び上げることを仕事にする人）の先導を受けたりしながら、一路、頂上を目指して駆け上がっていく。気が付くとレースは、弦間光明と弦間泰十、両名一騎打ちの展開になっていた。コース最大の難所である七合目から八合目付近では先行する光明に泰十が追い付き一時並走となるも再び30メートルの差をつけ、競り合いを制した光明が、頂上の鳥居を潜って真っ先にゴールテープを切った。

山頂は快晴無風、多くの登山客が万雷の拍手で迎えてくれた。優勝した光明は若干21歳、記

録は第1回大会優勝タイムを12分57秒も縮める2時間57分18秒。2位の泰十も3時間を切る快記録であった。このあとも黒駒体協の精鋭は、4位に梶原君友、7位に小池信夫、堀内好男が8位に入賞、榊原正男が9位と続き、富士登山競走の歴史に黒駒の名を刻む快挙となった。翌日の「山梨時事新聞」一面では弦間光明の前人未到の新記録樹立を称える記事とともに“黒駒勢、他を圧す”の見出しが大きく躍った。

物資に乏しく衣食にも困窮した時代、優勝賞金1万円という当時としては破格の賞金や副賞の数々を手にした一行は黒駒村に戻ると、地元村民から盛大な歓待を受けた。その後、弦間光明は富士登山競走で3連覇の偉業を果たし、富士登山競走名人の称号を博した。そして登山競走の伝統は黒駒勢の後人たちに引き継がれ、その後も途切れることなく入賞者を輩出していった。

富士登山競走草創期に黒駒体協が伝説的エピソードを遺してから半世紀以上、大会は70回の歴史を重ね、令和となった現在、弦間光明氏は90歳を超えてなお健在である。「険しい登山道を登り切って頂上を征服する気持ちは、おそらくやった人でなければ分からない。20代の血気盛んな時分に仲間とともに練習に励み、天下の霊峰富士に挑んだことで多くの人と出会い、そこで得た経験がその後の人生に自信と誇りを与えてくれた」と当時を静かに振り返っている。勇壮な富士を舞台に繰り広げられる富士登山競走は、これからもその歴史が続く限り日本最高峰の頂を目指すランナーたちに幾多のドラマと感慨を与え続けてくれることだろう。

執筆者 古屋 寛往
協力者 本庄 知
弦間 光明
堀内 好男

☆栄えある黒駒体協成績

- 第1回大会（1948年・S23年） 2位 神宮司昭三
第3回大会（1950年・S25年） 優勝 弦間光明 2時間57分18秒
2位 弦間泰十 4位 梶原君友 7位 小池信夫 8位 堀内好男
9位 榊原正男
第4回大会（1951年・S26年） 優勝 弦間光明 3時間07分18秒
第5回大会（1952年・S27年） 優勝 弦間光明 3時間00分45秒